

建設トップランナー フォーラムin豊田

■ 1 ■

新分野進出や技術開発に挑戦する地域の建設会社やその支援者で組織し、2009年度まで4年間活動した「建設トップランナーフォーラム」が、「建設トップランナー倶楽部」に衣替えし、新たなスタートを切った。新しい試みとして他団体と連携したジョイントイベントを企画。5月20日に愛知県豊田市で、第1弾となる「建設トップランナーフォーラムin豊田」森と水と生物多様性」を、中部森林開発研究会(本部・豊田市、梅村正裕会長)と共同開催した。地域の森林や川、生態系をどう守っていくかというテーマをめぐる活発な意見発表が行われた。4回にわたり、フォーラムの詳細を紹介する。

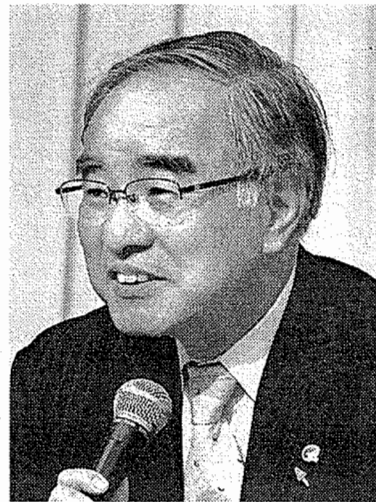
基調講演では、前愛知県副知事の稲垣隆司氏、また、建設トップランナー倶楽部の米田雅子氏が、10月に名古屋市中区で開催するCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)を契機とした自然と共有する地域づくりの在り方などについて話した。

基調講演

森と水と生物多様性

自然と共有する地域づくりを

稲垣隆司
前愛知県副知事



稲垣氏は、環境部門のトップ計画監理士の肩書技術士であり、1級ピオ

持。講演では、開発事業と生態系の保全の調和手法について考えを述べた。

まず生物多様性の保全について「単に自然を守るのではない。開発との折り合いをどう付けるかだ」と話し、開発の際の生態系再生手法である「生態系オフセット」を紹介した。

これは「ある動植物が生息する地域を開発する」と述べた。

また稲垣氏は、4年前の副知事就任時、COP10の招致を決意したと振り返った。「愛知は昔から干潟が多く、自然に親しみがあった。この地でぜひ会議を開きたい」と思ったという。

そして「COP10開催を契機に、愛知・名古屋の魅力、特に環境問題に地域を挙げて取り組んでいるという姿を世界に発信したい」と述べ、多様な主体の参加を呼び掛けた。



米田氏は、国内の森林資源を効率的に供給し、同時に安定的な需要を創出して森林と林業を再生

森林整備で生物多様性を保全

米田雅子
慶応大学教授

(建通新聞社)小林英明

する「次世代林業システム」について説明した。国産材の利用率を高めるために、森林の団地化で林業を効率化。さらに建築材料からバイオマスエネルギーまで、木材を100%利用する。

また、森林林業に欠かせない基幹的作業道や路網整備などを林業と建設業が連携して行う「林業作業道の整備について米田氏は「森に太陽の光を入れるための道であり、生態系の回復にもつながる」と述べた。

また、路網など基盤整備の促進が、生物多様性の保全、拡大にもつながると強調。「暗い森から明るい森へ」の転換を訴えた。

共働きの取り組みを紹介。岐阜県の「ひだ林業・建設業森づくり協議会」など「全国で既に30グループが組織されている」と伝えた。

米田氏は「森林整備の促進が、生物多様性の保全、拡大にもつながると強調。「暗い森から明るい森へ」の転換を訴えた。